

原 著

## 看護系・福祉系大学生の養護性の形成に関する一考察

——性別と乳幼児接触体験との関連から——

安 積 陽 子

## A Study on the Nurturance among Nursing and Social Welfare College Students

——Association the Nurturance with Sex and Experiences  
of Interacting with Young Children——

ASAKA Yoko

**Abstract :** The purpose of this study was to investigate nurturance among nursing and social welfare college students as affected by sex and experiences in interacting with young children. The questionnaire was distributed to college students in Kansai area. The respondents were 179 females and 62 males. Each score on the subscales of nurturance differed based on sex. As for the “Interest in young children”, and “Confidence in taking care of young children”, the mean values of female students were significantly higher than those of male students. The students who had experience in interaction with young children scored high on “Interest in young children” for both sexes. Further study is needed to understand the development of nurturance regarding the following points : 1) identification of the transition of “Confidence in taking care of young children” in a longitudinally designed study and 2) characterization the effects of quantity and quality of the experiences in interacting with young children on nurturance.

**Key Words :** nurturance, young adulthood, experiences of interacting with young children

**抄録 :** 親準備性を養護性という観点から捉え、大学生男女の養護性を乳幼児接触体験との関係から明らかにすることを目的に、質問紙による集合調査を実施した。関西圏の大学生男女 241 名の回答を分析した。その結果、①養護性の形成状態は性別による差があり、女子の方が男子よりも「赤ちゃん・子どもへの興味」「積極的養護的役割の受容」の得点が有意に高い、②乳幼児接触体験は男女ともに「赤ちゃん・子どもへの興味」にプラスの影響を与えている、が明らかとなった。今後は、女子における「自信」の推移を親になるまでの過程において明らかにすること、養護性を高める働きかけとして乳幼児接触体験の質や量、体験の時期の検討が必要である。

キーワード：養護性，青年期男女，乳幼児接触体験

## I はじめに

昨今、少子化を始めとした様々な社会環境の変化に伴い、子どもと接する経験が少ない青少年が増えている。このことは、親になった時に子どもへの関わりに

困惑する体験につながり、さらに育児不安をもたらす一要因であると指摘されている<sup>1)</sup>。2003年に成立した「次世代育成支援対策推進法」でも、青少年の親準備性を育む取り組みの重要性が謳われ<sup>2)</sup>、実際に青少年を対象とした乳幼児との交流体験の取り組みも報告されるようになってきた<sup>3,4)</sup>。このような活動が活発に

なる中、青少年の親準備性に関する基礎的研究がより一層重要となる。

親準備性の研究は、主に幼い子どもに対する感情と青年のもつ育児観の二つの側面から行われてきた<sup>5)</sup>。これまでに、乳幼児との交流によって青少年の子どもへの興味は高まること became 明らかになった<sup>6)\*</sup>。育児観に関しては、性役割意識と子育てへの意識に焦点が当てられてきたが、これらは主に母性意識の発達に着目しているため女子学生を対象にした調査が多い<sup>9,10)</sup>。つまり、これまでの親準備性に関する研究は、親になる資質の一側面に焦点をあて、対象者は女子学生に限られる傾向があった。したがって、青少年の親準備性の発達を理解するためには、男女に適応できるより包括的な概念を用いることが望ましい。

そこで本調査は、青少年の親準備性の把握のために養護性という概念を用いる。養護性は、相手の正常で健全な発達の促進のために用いられる共感性と技術とされる<sup>11)</sup>。本来、養護の対象は発達の可能性のあるものすべてとされているが、養護の対象を乳幼児に限定することによって、青少年の親準備性を明らかにすることが可能である<sup>12)</sup>。これまでの報告では、幼児期に性役割の観念が発達することによって、養護の対象に性別による相違が現れることが報告されている<sup>13)</sup>。女子大学生を対象とした研究では、養護性の構成因子は、1) 赤ん坊・子どもへの興味、2) 子どもをうまく扱える自信、3) 積極的な養護的役割の受容であると報告されている<sup>14)</sup>。また大学生男女の養護性を比較すると、「赤ん坊・子どもへの興味」の得点は、男子学生よりも女子学生で有意に高いことが明らかとなった<sup>15)</sup>。以上のように、養護性の構成因子の中でも幼い者に対する興味は性別によって異なることがわかっている。しかし、幼い者への興味以外の養護性の構成因子に関する性別差、親準備性に影響する要因として指摘されている乳幼児接触体験と養護性の関係について検討している報告はまだまだ少ない。したがって、本調査は大学生男女を対象とし、養護性の形成状態を性別と乳幼児接触体験との関連から比較検討した。

## II 研究方法

### 1. 用語の操作的定義

本調査において養護性は、「赤ちゃん・幼い子どもへのポジティブな関心・感情、対象を慈しみ育てようとする動機、養護的行動を起こす積極性」<sup>11)</sup>とする。

### 2. 対象

調査対象者は、関西圏の大学二校に通学する18歳から24歳までの大学生男女288名。そのうち、270名(回収率93.4%)より回答が得られ、有効回答数は241名(有効回答率83.9%)であった。調査は平成17年4月~6月に実施した。

### 3. 方法

調査協力を承諾した大学で質問紙による集合調査を実施した。

### 4. 調査内容

本調査で使用した質問項目は、以下の通りである。

#### 1) 養護性

小嶋<sup>15)</sup>が作成した女子青年の養護性に関する質問紙から、養護性の中心をなす三つの尺度24項目を使用した(表1)。それらは「赤ちゃん・子どもへの興味(以下「興味」とする)」「(12項目)」、「子どもをうまく扱える自信(以下「自信」とする)」「(6項目)」、「積極的な養護的役割の受容(以下「受容」とする)」「(6項目)」である。5-「そう思う」から1-「全くそう思わ

表1 「養護性」についての質問項目

#### 尺度1 「赤ちゃん・子どもへの興味」

- 1 赤ちゃんを見ても別にかわいいとは思わない\*
- 2 赤ん坊の泣き声を聞くとイライラする\*
- 3 幼い子どもの瞳に引きつけられるものを感じる。
- 4 テレビに赤ちゃんが出てくると興味をもって見る。
- 5 子どもの心の動きに興味がある
- 6 幼い子どもが泣いていると何とかしたいと思う
- 7 幼児の姿をついで追っていることがある
- 8 子どものことよりも青年の生活と心理に興味がある\*
- 9 子どもが遊んでいるのを見るのはおもしろい
- 10 小さい子どもに頼られるとうれしい
- 11 遊んでいる子どもの歓声をうるさいと感じる
- 12 保育所の前を通りかかると、中をのぞきたくなる

#### 尺度2 「子どもをうまく扱える自信」

- 1 幼児の相手をうまくやれると思う
- 2 小学生の遊び相手になれそうである
- 3 小さい子どもの相手は苦手である\*
- 4 子どもはあまり好きにはなれない\*
- 5 小さい子どもの世話には自信がある
- 6 子どもって面白い存在だと思う

#### 尺度3 「積極的な養護的役割の受容」

- 1 できれば自分も親となって子どもを育てようと思う
- 2 将来、親になった時のことを想像することがある
- 3 子育てにはいろいろわずらわしいこともあると思う\*
- 4 自分は子どもを育て、よい親になろうと思っている
- 5 将来、子どもをうまく育てられるか心配である。\*
- 6 自分は将来、わが子に慕われる親になれる気がする

\*は、逆転項目

ない」までの5件法での回答を求め、得点が高いほど養護性の形成はよい状態であるとみなした。小嶋<sup>14)</sup>は、質問紙の妥当性に関してビデオで提示した赤ん坊・子どもに対する調査対象者のプラスの情動と「赤ちゃん・子どもへの興味」、「積極的な養護的役割の受容」は、それぞれ有意な相関を示したことを報告している ( $r=.28\sim.47$ ;  $p<.01$ ;  $N=68$ )。また、信頼性については、「赤ちゃん・子どもへの興味」： $\alpha=.76$ 、「子どもをうまく扱える自信」： $\alpha=.85$ が報告されている<sup>15)</sup>。

## 2) 乳幼児接触体験

花沢<sup>7)</sup>の研究で用いられた乳幼児接触体験項目を参考に、14項目を選定した。「全くしたことがない」、「1,2回したことがある」、「3回以上たびたびしたことがある」の3件法での回答を求めた。素点の合計点は14~42点であり、得点が高いほど乳幼児と接した経験が多いとみなした。

## 3) 背景

対象者の性別、年齢、学部について質問した。

## 5. 分析方法

対象者の特性、乳幼児接触体験、養護性の下位尺度の得点を把握するために単純集計を行った。乳幼児接触体験の得点総和から多接触群と少接触群の二群に分け、養護性下位尺度の性別および乳幼児接触得点による比較を行った (t検定)。統計的解析は統計パッケージ SPSS 11.0 J for Windows を用いた。

## 6. 倫理的配慮

調査の実施前に、調査対象者に以下の内容を書面と口頭で説明した；①調査は匿名性を守る、②データは調査以外の目的には使用しない、③調査協力は自由意志であり、協力しないことによる不利益はない。当該学生が受講する講義を担当していない調査者が、データ収集を行った。

## III 結 果

### 1. 対象者の属性

調査対象者は男子学生 62 名、女子学生 179 名、計 241 名であった。年齢は平均 20.4 歳 (SD 1.45) であった。学部は看護学部 166 名 (68.9%)、医療福祉工学部 75 名 (31.1%) であった (表 2)。看護学部の学生は母子看護学実習未履修者である。

表 2 対象者の背景 (単位は名)

性別		学部	
男子	62	看護学部	166
女子	179	医療福祉工学部	75

表 3 男女別養護性下位尺度得点の平均値

	性別	N	Mean	SD	t 値
興味	男子	59	41.64	8.90	6.09***
	女子	174	48.84	7.47	
自信	男子	60	21.72	5.28	1.75
	女子	174	22.94	4.48	
受容	男子	61	19.10	4.90	2.26*
	女子	176	20.66	3.85	

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

## 2. 養護性について

養護性の三つの下位尺度について得点総和から平均値を算出し、性別間で t 検定を行った (表 3)。その結果「興味」「受容」で女子学生の値は男子学生よりも有意に高かったが、「自信」では差がなかった (「興味」 $p<.001$ , 「受容」 $p<.05$ )。

## 3. 乳幼児接触体験

乳幼児接触体験 14 項目の得点総和を乳幼児接触得点として算出した。平均値は女子学生 29.7 点 (SD 7.5)、男子学生は 25.0 (SD 7.1) であった。乳幼児接触得点について性別による t 検定を行った結果、女子学生の値が有意に高かった ( $p<.01$ )。

乳幼児接触体験の各項目についての回答を男女別に示す (図 1, 2)。14 項目中、「3回以上たびたびしたことがある」の回答が多かった項目は、「体に触った」、「おもちゃで遊んだ」「抱っこ」、「手を握った」であり、男子学生では 60%、女子学生では 65% を上回っていた。「全くしたことがない」の回答が 60% を超えた項目は、女子学生では「お風呂に入れた」、「ミルクを作った」の 2 項目、男子学生では「お風呂に入れた」「おむつを換えた」「ミルクを作った」「添い寝した」「着物を着せ替えた」「ほほずりやキスをした」「ミルクを飲ませた」の 8 項目で、女子学生の方が子どもの世話した経験のある者が多かった。

## 4. 養護性と乳幼児接触体験との関連について

乳幼児接触得点の平均値を基準に多接触群と少接触群の二群に分け、男女別に二群間で養護性下位尺度について t 検定を行った (表 4, 5)。その結果、男子学生では多接触群が少接触群よりも「興味」の得点に有

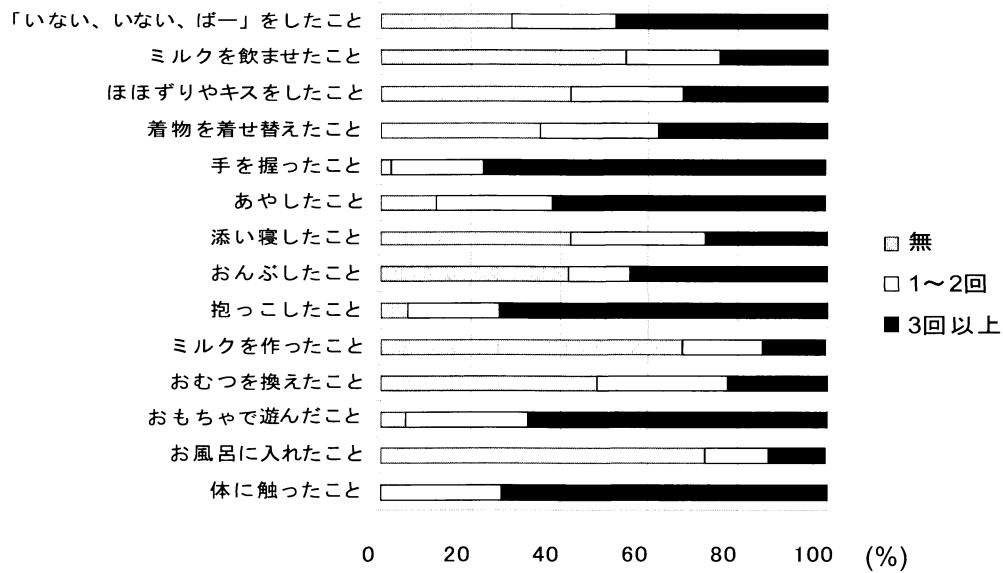


図1 乳幼児接触の各項目の回答 (女子)

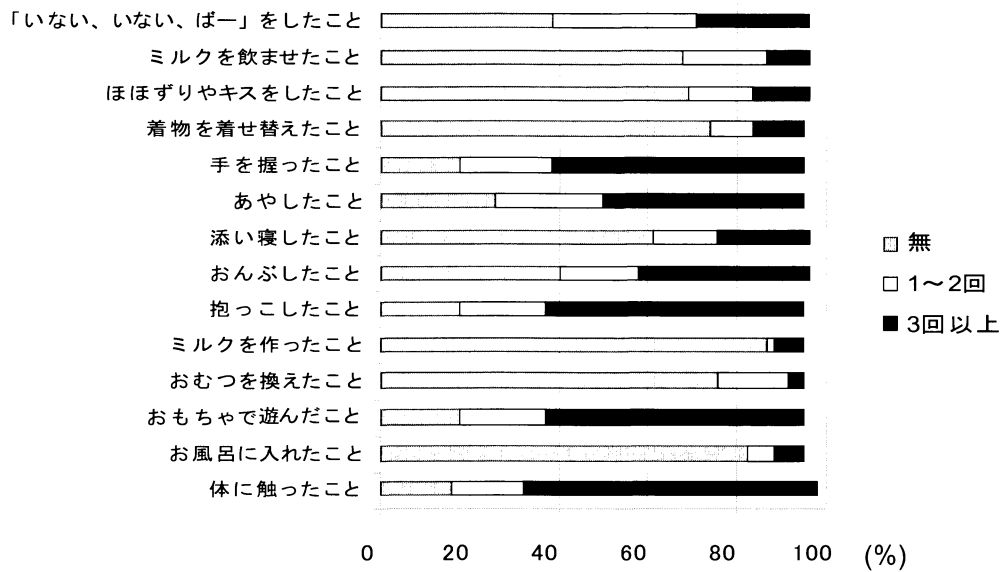


図2 乳幼児接触の各項目の回答 (男子)

表4 乳幼児接触体験得点別の養護性の平均値 (男子)

	乳幼児接触得点	N	Mean	SD	t 値
興味	少接触群	27	39.62	8.02	2.12*
	多接触群	29	44.55	9.25	
自信	少接触群	27	21.19	581.00	1.5
	多接触群	29	23.34	4.94	
受容	少接触群	27	18.85	5.19	0.73
	多接触群	30	19.83	5.02	

\*p<.05

表5 乳幼児接触体験得点別の養護性の平均値 (女子)

	乳幼児接触得点	N	Mean	SD	t 値
興味	少接触群	84	46.71	7.69	3.8***
	多接触群	87	50.91	6.74	
自信	少接触群	82	21.10	4.29	5.59***
	多接触群	89	24.65	4.03	
受容	少接触群	84	19.94	4.08	2.34*
	多接触群	89	21.30	3.57	

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

意に高く (「興味」 p<.05), 女子学生では三尺度ともに多接触群の得点が有意に高かった (「興味」 p<.001, 「自信」 p<.001, 「受容」 p<.05)。

## IV 考 察

### 1. 性別による養護性の形成状態

青年期男女の養護性の形成状態を性別および乳幼児接触体験との関連から明らかにすることを目的に、既存の質問紙を用いた集合調査を実施した。その結果、養護性の下位尺度の中でも「興味」「受容」は女子学生の得点が男子学生に比べて有意に高いことがわかった。この結果は、大学生男女を対象とした結果、および中学生から大学生男女を横断的に調査した結果と一致している<sup>15,16)</sup>。3歳までの幼児は、性別に関わらず同じように赤ん坊に興味を示すが、4,5歳になると性別役割の観念が発達してくるため、男児は養護の対象が乳幼児以外に変化し、女児は幼い者への興味が持続し、ごっこ遊び等でも他者を世話する行動が多く観察される<sup>11)</sup>。したがって、性別役割の影響のもとに幼少期から養護の対象が方向づけられていることが、「興味」「受容」の性差として反映されたと考えられる。

一方、「自信」では性別間に得点の差がみられなかった。養護性の他の構成因子および乳幼児接触体験の結果を総合すると、女子学生は「興味」「受容」、乳幼児接触体験の得点は男子学生よりも高いが、「自信」は男子学生と同程度であると把握できる。つまり、女子学生は子どもに対する興味があり、将来親になることや育児に対する積極的な姿勢はあるもの子どもに接する自信はそれほど高くない状態であると理解することができる。女子大学生の育児への自我関与度は男子大学生よりも強く、将来担うであろう育児への責任や不安を感じていることが報告されているように<sup>17)</sup>、女子学生の場合、「自信」は今後担うであろう育児への責任を反映した結果であると考えられる。今後は親子備群である年代から実際に親になるまでの年代にかけて、子どもの世話に対する自信はどのように培われているのか、将来の親役割に対する自我関与度の視点から検討する必要がある。

### 2. 乳幼児接触体験による養護性の形成状態

本調査の結果、乳幼児接触体験が多い者の方が男女ともに「興味」の得点が高いことがわかった。この結果は、幼い子どもとの交流が親準備性を高める要因であることを指摘する過去の研究結果<sup>6-8)</sup>を支持している。養護性は対人関係の場で発揮される特性であり、養護的役割は実際に養護する側、される側双方の役割体験を通して内面に形成される<sup>12)</sup>。養護する側として

幼い子どもと交流することによって、対象と結びついた具体的な場面やイメージが蓄えられ、対象への「興味」が増し養護性の発達が促されることが考えられる。

本調査の結果から、男女ともに幼い子どもとの交流を体験している者の対象への興味が高いことが確認できた。しかし、その他の尺度は性別により異なり、女子学生では乳幼児接触体験が高い者は養護性のすべての尺度が高かったのに対して、男子学生では「興味」以外の得点では差がみられなかった。乳幼児接触得点は女子学生が男子学生に比して有意に高く、遊びや触れ合い、世話的な項目のいずれにおいても体験が多かった。したがって、女子学生は男子学生よりも子どもを養護的な役割を担ってきており、その体験の差が養護性の形成状態に表れていることが考えられる。生涯発達の視点で養護性を捉えると、働きかけによってどの時点でも養護性を高めることは可能である<sup>18)</sup>。実際に親になるまでの過程において、乳幼児との交流の体験の質や量、体験の時期が、どのように養護性の形成に影響を与えていくのかを明らかにすることによって、幼い者との交流の機会が少ない青少年に対して養護性を高めていける働きかけを検討することができる。

以上のことから、養護性の形成状態は性別による差があり、女子学生の方が男子学生よりも「興味」「受容」の形成状態はよいが、「自信」では性別による差はみられない、乳幼児接触体験が多い者の方が養護性の得点が高く、特に女子学生ではすべての下位尺度で高いことが明らかになった。今後は、女子学生における「自信」の推移を親になるまでの過程において明らかにすること、養護性を高める働きかけとして乳幼児接触体験の質や量、体験の時期の検討が必要である。

## V 研究の限界

本調査では、対象者が看護系・福祉系大学の学生としている。さらに全対象者の約7割を占める看護系大学生については、母子看護学実習未履修者としているもの、授業・演習はすでに始まっており、幼い者の知識や関心は他学部の学生よりも多いことが考えられる。したがって、本調査で得られた結果は、看護系・福祉系大学生に限定した結果であると捉える必要がある。今後は、現代の青年を反映した結果を得られるような標本抽出の方法論も検討する必要がある。

(謝辞：本調査を実施するにあたり、質問紙調査に快く回答して頂きました対象者の皆様、質問紙調査の実施にご協力頂きました各大学の教員の皆様に心より御礼申し上げます。)

#### 文 献

- 1) 牧野カツコ：育児における〈不安〉について、家庭教育研究所紀要 1981；2：41-51
- 2) 藤内修二：次世代育成支援対策推進法と母子保健計画。母子保健情報 2003；48：90-95
- 3) 片山美香，清水凡生，榎本美恵子他：小学生を対象とした赤ちゃんとのふれあい体験学習の試み。思春期学 2003；21(1)：113-125
- 4) 神戸市：神戸市西区における次世代育成支援協同事業「命の感動体験」報告書。神戸市。2005；1-18
- 5) 青木まり：母子関係の前段階－女子学生青年における「母性準備性」－。心理学論評 1988；31(1)：76-87
- 6) 岡本祐子，古賀真紀子：青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析。広島大学心理学研究 2004；4：159-172
- 7) 花沢成一：母性心理学。第一版，医学書院，東京，1996，61-91
- 8) 岡美恵子，外間登美子，坂本良子：乳幼児との接触経験と父性意識について－男子学生のアンケート調査より－。思春期学 1999；17：130-133
- 9) 湯船貞子：母子関係よりみる母性意識形成要因。母性衛生 2003；44(4)：442-454
- 10) 松嶋弥生，皆川恵美子，宮岡久子：青年期後期における「母性準備性」と性役割との関連性－看護学生と他学科の学生との比較－。母性衛生 2001；42(4)：645-652
- 11) 小嶋秀夫編。乳幼児の社会的世界。第一版，有斐閣，東京，1989，170-186
- 12) 小嶋秀夫編。乳幼児の社会的世界。第一版，有斐閣，東京，1989，187-207
- 13) Fogel A, Melson G, Mistry J: Conceptualizing the determinants of nurturance: A reassessment of sex differences. Fogel A, Melson G ed. -Origins of Nurturance Developmental, biological and cultural perspectives on caregiving. Lawrence Erlbaum associates, Hillsdale, New Jersey, 1986, 53-67
- 14) 小嶋秀夫：養護性の概念化とその発達過程の推論。日本教育心理学会第33回総会発表論文集 1991；205-206
- 15) 中西由里，粟津幹子：「養護性 (nurturance)」に関する一研究－幼児を持つ母親と未婚大学生の専攻別による比較－。相山女学園大学研究論集 社会科学篇 1996；27：9-18
- 16) 安積陽子：青少年の養護性の発達に関する一考察。第60回日本助産師学会誌抄録 2004；18-28
- 17) 山田順子：大学生の親志向意識に関する研究。東京家政学院大学紀要 1986；27：167-179
- 18) 山内ひろみ，松尾祐作：男性の養護性の発達に関する研究。福岡教育大学紀要 2001；50：247-253